北海道の乾直人による収穫を控えた圃場ミーティング

（文・写真／齊藤義崇・北海道土を考える会事務局）



1 西谷内智治氏の乾直圃場。完璧な出来栄えで参加者らを魅了した

増殖中の乾直人が岩見沢に出現！

北海道では依然として、乾直人（水稲を乾田直播で栽培する人）が増殖している。去る9月1日、晴天。昼下がりに、北海道内で乾直を始めた初心者、腕に覚えのあるものなど24人の乾直人が岩見沢市に集結した。「乾直人の圃場ミーティング」と銘打った研修会は、北海道土を考える会の中央・道央の両支部が開催した。会場を提供してくれたのは、自社で改造・製作した農機から最新のGPS機器までを巧みに操る西谷内智治氏と、6品目の水田輪作体系の始祖・新田愼太郎氏の二人だ。

西谷内製作所で独自農機を堪能

最初に訪ねたのは「西谷内製作所」だ。西谷内製作所とは、西谷内氏の愛称で、この人の農機に対するこだわりと工夫がとにかく凄いのでこう名付けさせてもらった。

写真2は自作の肥料散布機である。古い田植機を5万円で知人に譲ってもらい、肥料散布機を搭載したそうだ。散布幅は約15m。専用機にするほうが、きめ細かい操作ができ、高い散布精度を実現できるという。無論、乾田直播の分肥・追肥が主な使用目的だ。本人は「本当は新しいのが欲しいけどね」と苦笑いも浮かべていた。実際の農機製作を行なっている工場に隣接するいくつかの農舎に所狭しと並ぶのは、少し工夫を凝らした改造作業機やGPSガイダンス・自動操舵装置を装着したトラクターだ。参加者らが矢継ぎ早に投げかける質問に、西谷内氏は製作費用からノウハウまですべてを丁寧にさらけ出してくれた。

作業機ネタは尽きず、あっという間に時間が過ぎてしまう。「今日は乾直圃場ミーティングですから（笑）」という事務局の仕切りで、参加者一同は「そうだ、そうだ」と大笑い。本題の西谷内氏の圃場に急行した。

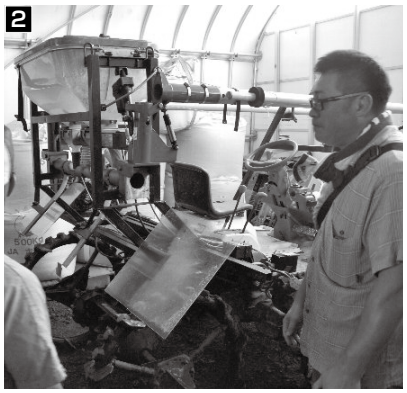
完璧な生育状況の乾直圃場を拝見

まず移動した先は大豆圃場（写真3）だ。西谷内氏の圃場では、3年前よりスガノ農機と共同で、水稲と小麦、大豆、コーティング野菜種子などに対応可能な真空播種機の性能試験を行なってきた。本年は大豆での検討だ。写真5は、2台の播種機で播いた大豆の着莢数の違いを比較したものである。左が慣行の播種機（目皿式の大豆播種機）で播いた大豆で、右が試験した真空播種機で播

第21回 北海道の乾直人による収穫を控えた圃場ミーティング


4


3


2


6


5

2「西谷内製作所」オリジナルの施肥散布機。乾田直播の分肥・追肥に活躍している　3 真空播種機の試験区のある大豆圃場で水田輪作体系の説明に食い入る参加者ら　4 自社圃場で説明する西谷内智治氏　5 播種機の違いによる大豆の莢数の比較（左：慣行機、右：試験中の真空播種機）　6 西谷内智治氏による乾直栽培の稲姿

いたものだ。一株当たりの莢数は慣行機のほうが多いが、単位面積当たりの株数は畝間が狭い試験機のほうが約2倍となり、全体の莢数は上回る。試験機の導入で、収量増加に期待が持てそうだ。

この試験は乾田直播での挑戦から3年目を迎え、改善点や仕様を冬期にまとめて、さらに手を加えて来春も試験を行なうそうだ。納得するまでは、とことん追求する西谷内氏の姿勢が反映されるとあって、今後も目が離せない。

さて、本題の乾田直播圃場はどこにあるのか。その昔、乾直圃場は草だらけ、葉色ムラ、生育ムラが当たり前だった。乾直圃場の噂は、隣の集落にも知れ渡るほど、移植栽培とかけ離れた様子の圃場が多かった。しかし、農道を進んでいた先導者の車が止まった先に広がっているのは、見事な水田である（写真1・6）。ピラフやチャーハンに向くとされる品種「大地の星」の乾田直播は、完璧な生育状態であった。

その出来栄えを目にすると、苗立本数や茎数、播種方法など、乾直談義のネタは尽きない。西谷内氏は自作のコンビネーションハローで10a当たり10kg播種した。除草剤の散布回数は3回、その内訳は出芽前に非選択性の除草剤を散布し、2葉期以降に選択性除草剤を2回、15m幅のブームスプレイヤーで散布した。ちなみに基肥散布にはブロードキャスターを用いるが、追肥は前述の改造した施肥機で1～2回、生育状態に合わせて量と回数を加減しながら散布している。

食味の探求にも熱心に取り組む新田氏

続いて、一行は新田氏の圃場へと移動した。栽培試験を行なう際には、生育状況を調べる株元に調査棒を立てて目印にする。乾直王者の新田氏の圃場ではたくさんの調査棒が目にとまった。変わらずの研究熱心ぶりに、参加者の皆が圃場に釘付けとなり、説明を待った。

新田氏は、水稲（無代かき栽培）、水稲（乾田直播）、秋播き小麦、大豆、ナタネ、トウモロコシ、直播ビートの6品目、34haの水田輪作体系の実践者だ。バランスのよい作付体系はここ数年変わらない。近年、視察者、来訪者が後を絶たない。

目の前の圃場では良食味の試験を行なっているという。稲が生育後半に地力窒素を吸収すると収量は高まるのだが、コメの色やつや、食味に悪さをする。とくにコメの食味は、玄米の蛋白含有量に影響を受けるとされる。岩見沢市内でも北村地区は

第21回 北海道の乾直人による収穫を控えた圃場ミーティング


8


7


10


9

7 乾直米の食味試験についても解説する新田慎太郎氏　8 新田氏の見事な乾直圃場。見渡す限りそろった稲が印象的だ　9 新田氏の乾直圃場の稲姿
10 水田端での青空ミーティングは話題が尽きず、良き情報交換の場になった

泥炭土壌地帯で、泥炭から窒素を吸収すると、水稲は多くの蛋白を生成し、登熟期に向かう籾へと吸収される。その影響を調査しているというわけだ。

こんな見事な乾直づくりが実践できているのに、食味まで追求しようとは――。参加者の乾直人は質問も忘れ、畦際から稲姿や籾の出来栄えに食い入った（写真8・9）。

井戸端ならぬ水田端で繰り広げられる乾直談義

圃場視察の後は、その場で圃場ミーティングが始まった。参加者からの質問は品種や初期生育に始まり、使用する作業機、除草剤、肥料など多岐に渡った。乾直人が集まったら必ず始まる、お約束のシーンだ。

事務局の満足な進行のないまま話題が土づくりへと移行すると、圃場主の新田氏が口火を切った。話題は水田でのプラウの引き方についてだ。これにはまず、田村裕良氏（北海道土を考える会会長）が反応した。「まず口開けは、3連目がややかかるくらいボトムを落として……」。続けざまに、外周での仕上げ、出来高の満足度について、それぞれの意見が飛び交った。

さらに、輪作体系や経営にまつわる話に広がり、腰を下ろすもの、うなずくもの、ビデオを回すもの、2～3人で小談義するものなど、情報交換が盛んに行なわれた（写真10）。これぞ、土を考える会である。

乾直人らは圃場の前で、地元では味わえない独特で有意義な半日を過ごした様子だった。遠方から車を走らせたものも満足顔で散会した。

全国の乾直人に、この会のありようを伝えねば。乾直人の満足しきった顔を眺めれば、そのときのトークが回想される。初心に戻り、こうした水田端でのミーティングの輪が広がることを願ってやまない。


11

11 北海道の乾直人たちの集合写真